絵画専攻
日本画領域
油画領域
版画領域

Painting Course
Japanese Painting
Oil Painting
Printmaking

漆崎 正樹
URUSHIZAKI, Masaki

日本画の潮流の中での個性
Personality in Japanese painting of tide

私はこの二年間で、好奇心や日々の感情を造形表現に置き換える方法を、絵画制作というかたちで学んできました。現実とは離れた視覚・四角世界の中で自分を表現したいという欲望は皆共通していますが、制作過程における様々な要素（モチーフ、画材、描写方法、画面のサイズ、マチエール）の選択が、作者の人間性の違いあらわにします。

私は学部時代からずっと、日本画特有の画材である和紙と岩絵の具による膠彩表現を行っております。その制限の中で、普段見ているもの、感じていることを、独自性のある造形として表現することを目標に、制作活動を続けています。

昨今のコンピューターネットワーク社会の中で、あえて伝統的な日本画という表現ツールを学ぶ私が、何を考え、どのような作品をつくってきたのかを振り返るとともに、卒業後社会のなかでどのように自分を発信できるかを考察しました。

素人
Beginner
岩絵具、水干絵具 / 雲肌麻紙
Mineral pigments, dyed mud pigments on Japanese paper
180 × 270 cm

折笠 敬昭
ORIKASA, Yoshiaki

芸術における存在の不確かさについて
About the uncertainty of existence in art

在るはずのなかった日々
Every day which shouldn't exist
岩絵具、水干絵具、アクリルガッシュ / 三彩紙
Mineral pigments, dyed mud pigments, acrylic paint on Japanese paper
210 × 700 cm

私は自分自身の制作活動において、常に一貫したひとつのテーマを持っている。それは、「存在の不確かさ」である。人が何かを認知し、そこに在ると思っているものは、自分も含め、実際にそこに確固として本当に存在しているのだろうか。その疑問こそが、私の表現活動の原動力となっている。現実を生きる我々にとって、「存在」という言葉は、ひとつの「事実」として、人と人との関係性の中にこそ見てとれるものである。私は今回この作品で、顔のない「誰か」の葬列を描いた。人に認知され、築いてきたひとつの関係性の物語が終わる瞬間、そこに過去、現在、未来を通して存在しているのは、「在るはずのなかった日々」であると言えるだろう。揺れ動く存在という事実の中で、人間の本質を見つめるような作品を私は描いてゆきたい。

黒木 美都子
KUROKI, Mitsuko

不可知の領域に潜む美しい世界
The beautiful world that is covered in the unknowable domain

「美」とはどこにあるのだろうか。
私たちが黄昏に抱く途方もない美しさとは、単に着飾られた美とは異なる、普遍的で不可逆的で不滅的な存在だ。
それは時代・人種・文化を違えても、必ずそこにあり続けている。
しかしながら、水平線の向こう側を決して見ることができないように、その存在を人は目に捉え知ることができない。そこにある、という予感だけを与えて。
だがもしも、その神秘に人が触れられるとしたら恐らく、この世の果てなのであろう。
生と死が織り交ざり混沌へと誘われる様は、人知の及ばぬ「美」を私に感じさせるのである。

よさりつかた
YOSARITSUKATA —Boundary of the night—
岩絵具、白土、墨 / ポリエステル画布
Mineral pigments, white soil, sumi on polyester
194 × 336 cm

黒田 花菜子
KURODA, Kanako

対話
Dialogue

　樹木を、描いてきました。

――故郷の群馬県北部に広がる、上州武尊山や尾瀬といった自然の中で営まれる生命の循環。子どもの頃の私は時にその中に入り込み、時に“人間としての己”を自分自身の中に強く感じ、対峙してきました。

　そこから浮かんだ疑問や、あふれる喜怒哀楽、たくさんの思い。それを表現したいと画面に向かい、線描に近いタッチで色彩を重ねながら浮かび上がる樹木へ問いかけ、それはそのまま描く己自身に還り、めぐり巡って絵筆からまた樹木へ、そしてまた絵筆へ……。

　それは“対話”でした。対話はまだ、続いています。

翁 / OKINA
岩絵具、水干絵具、色鉛筆 / 高知麻紙
Mineral pigments, dyed mud pigments, colored pencils on Japanese paper
194 × 390.9 cm

坂田 恭平
SAKATA, Kyohei

「水」「墨」「画」について
“Suibokuga” as water, sumi and painting

氣断層 / Layer of energy
金箔、ラッカー、墨 / アクリル板
Gold leaf, lacquer, sumi, on acrylic board
408 × 408 × 270 cm（撮影：森勇馬）

今回制作した「オルタナティヴ天井画」は、私たちの周りに存在する空気を捉えるために、墨によって空間へと写し出すように制作した。

私たちの目には見えない存在―エネルギー、時間を捉えるための道具として、この2年間で随分と墨に魅了された。墨は古来より伝わるモノリスである。生まれた時代の時間を封印した化石であり、人類の記録と表現の糧となるために煤と化した木々たちの墓碑ともいえよう。

私は和紙を用いず墨を撥水、乾燥させることによって、それぞれの墨が体験してきた時間を現像する術を手にいれた。一夜以上かけて現れてくる炎や地層、稲妻を連想させる表情は、エネルギーの連鎖と生命の起源を感じさせる。これを、理想として据えている純粋な「水」と「墨」の関係性によって成立する、文字通りの「水墨画」と呼びたい。

杉岡 みなみ
SUGIOKA, Minami

距離と欲望の表象空間
Places of distance and desire

したたり

私が私であるために必然で
他者との間に存在するどうしようもない差異を
より確固たるものにしてしまう距離。

拒絶のようであり 抱擁のようである 距離

木漏れ日の間を泳ぐとき
雪の眩しさに目を焼かれるとき
透明な海の深さに身がすくむとき

愛情を超える何かを密着的に感じながら
すぐ近くに居る他者のことを果てしなく遠く感じたりする

罪深さを感じる中で
でも　欲望することをやめることはできない

点はついに重なりはじめ
　したたり
罪と許しと命の音色で満たされた世界
そこは私が許された空間なのだと
ただ黙って見守る森のように

　修了制作『したたり』に霊感を与えてくれた、現代詩人・久世孝臣氏と、同氏の作品『「滴り」の世界』に、心から謝辞をここに記す。

修士論文について

　現実の対象物を見つめる時に心に沸き上がってくる愛しさ、焦がれ、憧れ、悲哀といった心の動きは、なぜ沸き上がってくるのか。

　対象との間にある距離感は、たとえどんなに近くにあったとしても、どんなに見つめ、写実的に描いたとしても、決して消滅しえないと感じてきた。距離を縮めることを切望して対象を見つめ続けたとしても、その対象との距離は縮まるどころか、さらに遠くへと遠のいて行く。対象への接近の欲望、ひいては同一化の欲望は、日常生活の中であっても、作品を作る時であっても、決して満ち尽くすことはない。

　しかし、一見心理的な欠乏状態であるかのように見えたとしても、遠くにある対象を強く指向している主体とは、果たして本当に欠乏状態と言えるのだろうか。

　そもそも、視覚的に捕捉された距離と、心理的な距離というのは同義なのだろうか。

　距離と欲望について、また、まなざしとそれらとの関係性についてを、ヴァルター・ベンヤミンのアウラの概念や、折口信夫の著作「死者の書」を用いながら考察を重ね、表現方法の可能性について、自身の近作を用いながら考察した。

したたり / Drip of forgiveness
岩絵具、胡粉 / 高知麻紙 / Mineral pigment, whiting on Japanese paper / 274 × 182 cm

手綱 笹乃

TEZUNA, Sasano

自己意識の海に漂う影を描く

Drawing a shadow floating in a sea of self-consciousness

修了制作にかかる以前は手話をモチーフにするなど、「言葉」を気にして制作していたところがあり、修了論文では「手」と「言葉」について取り上げました。そして、以後も変わらずモチーフとして登場し続けているのが、不自然なほど長く量の多い髪の毛と女性の組み合わせです。それらは自分の見聞してきたことや、胸のうちで思っていることの心象風景です。切らなければどこまでも長く伸びる髪の毛に人間らしさを感じながらも、人物の肌は人間のそれとは違う色味に描き、箔を使うことで異質なコントラストを描こうとしています。

自己意識の海を漂う心象という影を画面に描き出すことは、その時の自分の感情や置かれた環境によって大きく左右され、またその影の輪郭は普段とても曖昧です。その輪郭がはっきりと見える一瞬を見逃さないようにしたいと思っています。

白い意識の海を漂う / Floating in a sea of white consciousness
岩絵具、顔料、真鍮箔 / 高知麻紙
Mineral pigments, pigments, brass leaf on Japanese paper
162cm × 390.9 cm

松原 麻衣
MATSUBARA, Mai

絵画における色彩と空間
Color in painting and space

絵画の特質は絵具で構成された平面だということである。物質が3次元的空間に存在している場合、その物質同士の実際の距離でしか空間を感じられない。しかし、2次元である絵画は、実際の物理的関係（つまり絵の具という物質が塗り重ねられているという、実際には物質同士の距離感がゼロであるという状態）を超えて無限の距離（空間）を感じさせることができる。平面に描かれたものでありながら奥行きを感じることができる。手前と奥の関係、地と図の関係をひっくり返すことができること、それが絵画の最大の特技である。絵画空間とは、色彩そのものが絵の具という物質感を伴ってつくられる色彩の重層空間なのだ。

私は、3次元的空間の再現ではなく、絵の具そのもの、色彩そのものによって空間を感じられるような絵が見たい。自分が絵の中に入っていけるような、絵の内側から滲み出す色彩が我々のいるこちら側に作用するような、そんな絵が描きたい。

春待つ音 / The sound of waiting for spring
岩絵具、水干絵具 / 高知麻紙 / Mineral pigments, dyed mud pigments on Japanese paper
75.8 × 162 cm / 5 枚組 (5 pieces)

山嵜 雷蔵
YAMASAKI, Raizo

原始的な恐怖心への視覚アプローチ
Visual approach to primitive fear

この二点の作品に於いて私は「背景」を画面から排除した。言い方を替えれば、モチーフのアウトラインを画面の外に描いている。また、描かれているものが何なのか、それを説明するための要素を極力削ぎ落とし、その代わりにモチーフの中の形、うねり、空間、質感に重点を置いた。

「ムクリコクリ」という民族語彙をご存知だろうか。親が言うことを聞かない子を「ムクリコクリ、鬼来るぞ」と脅す古い風習がある。しかし、この得体の知れない何者かについては判然としない記述が多く、単に‘怖ろしいもの’という説明があるだけで、その全貌は茫々たるものだ。そこには一個人の想像力が介入し得る余白が残されていると言えるだろう。私はこの言葉と風習に内在する神秘性に魅力を感じ、一貫して制作の題材にしている。

ムクリコクリ / Mukurikokuri
岩絵具、泥絵具 / 石膏下地 / Mineral pigments, dyed mud pigments on plaster base
184 × 552 × 4.5 cm / 2 隻 (2 pieces)